

インド
禅定林

大本堂落慶記念法要を厳修

震災支援のネパールも訪問

2月8日、天台宗海外寺院・インド禅定林（インド・ポーニ市／サンガラトナ・法天・マナケ住職）において今年で9回目を迎える大本堂落慶記念法要が厳修された。

サンガラトナ住職を導師に、日本から西郊良光天台宗機顧問、横山照泰一隅を照らす運動総本部長、谷晃昭群馬教区西光寺住職、インドにおいて仏教による社会福祉活動を展開するパンニヤ・メツ



学校の落成式に集った地元の人々と横山総本部長ら（ネパール・平成28年2月）

タ・サンガ（PMS＝智慧と慈悲の僧伽。サンガラトナ・法天・マナケ代表）の日本委員会メンバーが参加した。

横山総本部長らは、ネパール・ソルクンプ県で昨年起きた大震災の影響で倒壊し、一隅を照らす運動総本部を通じて、全国から寄せられた善意の支援を受けて、PMSが新たに建設した学校の落成式を

終えてからの参加となった。

この日のためにインド各地から約20万人もの仏教徒が集まり、天台様式と上座部仏教式による盛大な法要が執り行われた。インド広しと言えども、一日でこれだけの人数が集まる大規模な仏教法要は極めて稀有であり、中には前日から良い場所で法要を眺めようと場所を取りに来る熱心な信者も見受けられた。

法要の翌日には建物の老朽化により移転新築が予定されているPMSが運営する孤児

院「パンニヤメツタ・子供の家」の地鎮法要式が移転先のナグプール市内にて執り行われた。新しい孤児院は丁度一年後にあたる来年の2月8日の10周年法要の日に竣工予定。横山総本部長は「教育の現状にマッチした場所に新しく子供の家が完成するのを楽しみにしている。新しい子供の家での環境で忘己利他、一隅を照らす国宝的多くの人材が生れる事を願っている」とエールを送った。（報告＝千田明寛・埼玉教区最明寺法嗣）